# 書　　評

**田代博著：『世界の「富士山」』**新日本出版社
2012年6月刊，190p.，1,600円（税別）

お笑いコンビのサンドウィッチマンが経営する「全世界トラベル社」が企画する旅行ツアーを紹介するという形で進行するNHK高校講座地理に，同社のコンサルタントとして（時にはケッペンに扮して）しばしば登場する著者をご覧になった読者も多いのではないか。また著者は充実したホームページを開設しているので，こちらをご覧になった読者も多いだろう。このホームページを拝見すると，著者の地理に対する思い，特に富士山に対する熱い思いが伝わってくる。本書はこの著者による，『今日はなんの日，富士山の日』（新日本出版社，2009年）等に続く，「富士山もの」の最新刊である。

本書は，書名からわかるように日本の富士山ではなく，世界で日系人や日本人旅行者に「○○富士」と呼ばれている山々を54座集め，ひとつの山につき数ページを費やして説明したものである。山の概要に加え，それぞれの山ごとにその山の特徴を理解できるように工夫して説明が行われている。本書で取り上げる山の位置と識別番号を示した世界地図がはじめに示されているが，各山の説明を行っているページには，その山の位置が国や地域のどのあたりにあるのかがわかる縮尺の地図が別途ついている。また少なくとも1枚，山によっては数枚の写真（モノクロ）もあり，巻頭にはカラー写真が16枚あるので，こうした写真を眺めているだけでも楽しい。確かに日本の富士山にそっくりの形をした山もあるが，これがどうして「○○富士」となるのかという思いを抱くものも多い。見る角度を変えればもっと富士山らしくみえるのかもしれないが，もしかすると，後述するように「望郷の念」の強さがなせる技という側面があるのかもしれない。

本書は4つの章からなっている。世界にちらばる山々を紹介するので，一般的な地域区分を用いて章に分けたのが第2章から第4章にあたる。第2章の「アジアの富士山」では19座，第3章の「ヨーロッパ・ロシアの富士山」では11座，第4章の「南北アメリカ・オセアニアの富士山」では19座が取り上げられている。そして本書の最大の特徴といえる第1章の「望郷の富士山」には5座があてられている。この第1章のねらいは以下の通りである。すなわち「○○富士」と呼ばれるということは，その地に移民として渡った日本人が多い，あるいは太平洋戦争中多くの日本人がその地に兵士として駆り出されたということでもある。こうした人々が富士山に似た山をみて故郷に思いを寄せ，「○○富士」という名称がついたわけである。つまり世界にちらばる「○○富士」の存在は，今日の旅行者も含めて日本とのつながりの深い場所が世界の各所に存在していることを表している。そうした山々の中で，特につながりの強い5座を第1章で取り上げている。

順当な結果と言うべきだろうが，本書で取り上げられている54座のうち，38座は成層火山と分類されている。また54座のうち標高がもっとも高いものは6439m（アンデス山脈にあるイリマニ山，「ボリビア富士」），もっとも低いものは22m（パプアニューギニアのニューブリテン島にあるタブルブル山，「ラバウル富士」）となっている。6000m峰（6000～6999m）は1座，5000m峰は6座，4000m峰は2座，日本の富士山も該当する3000m峰は10座，2000m峰は11座，1000m峰

も11座，1000mに満たないものは13座含まれている。なお54座のほかに，「○○富士」の候補としたがそのようにみなす根拠が弱いとして掲載を見送った5座について，第2～4章のコラムでそれぞれ紹介している。

著者が一番力を入れたと思われる第1章で取り上げた5座については，第2章以降での説明に比べ，各山の説明に多めの紙幅を割いている。たとえばアメリカ合衆国ワシントン州にあるレーニア山（タコマ富士）では，山の概要説明に加え太平洋戦争時に行われた日系人の強制収用に関する説明や，現在富士山とレーニア山が「姉妹山」になっていることから始まった「富士山・レーニア山教育交流プロジェクト」についての紹介も行っている。このように特に日本との関係が強い山々が別格として第1章で取り上げられているのである。

第2章以降では，各章のはじめに「概説」として各地域における山の分布や，各地域と日本との関係についての簡単な説明を行っている。この説明を読むことで，各章で取り上げた「○○富士」の多寡や地域内の偏りの存在を理解することができる。たとえば第2章「アジアの富士山」で取り上げた19座のうち台湾にあるものは6座と比較的多いのだが，その理由を地形と日本との関係に求めている。すなわち台湾には山が多いこと（3000m以上の山が約130座あるとしている），また日本による統治の時代があった影響で「○○富士」が多くなる素地があったとしている。第3章と第4章でも同様の説明があるので，各地域の個別の山の説明を読む前の導入として「概説」に目を通すとよいだろう。

世界地誌に詳しい人ならば該当しないが，本書を通読すると，意外なところで日本との関係が存在している，あるいは存在していたことを教えられる。たとえば，スペインのカナリア諸島が日本の遠洋漁業の基地になっていること（第3章，テイデ山，「カナリア富士」）や，アラスカ州南東部シトカではかつてサケやイクラ加工業に従事する日本人が多く住んでいたこと（第4章，エッジカム山，「シトカ富士」）などである。また，太平洋戦争時に日本とのつながりの深かった場所が各地に存在していたことも再認識させられる。千島列島のマトゥア島（松輪島）には旧日本軍の飛行場があったこと（第3章，サリチェフ山，「松輪富士」）や，フィリピンのルソン島にあるアラヤット山の麓にある旧マバラカット基地が太平洋戦争における初めての特攻作戦の出撃基地になったこと（第2章，アラヤット山，「マニラ富士」）などである。このマニラ富士を本土の富士山と重ね合わせて若き航空兵が出撃していったことであろうという記述には，戦後長い時間がたった今でも悲しいものがある。

本書の最後は，章番号のつかない追加的な記述の部分になっているが，著者としてはやはり最後に日本の富士山に触れずにはいられないという内容の記述になっている。著者ほどに富士山に思い入れのない評者でも，やはり富士山は特別な山だという思いがある。大学時代に山岳部に所属していたこともあり，その後もほそぼそと山歩きを続けているが，どこの山を歩いていても遠くに富士山を認めると，「富士山が見えた」という思いが湧いてくる。8年間余り海外で生活した後に帰国した時に，機上から夕焼けを背にした富士山を遠方に認めた時は，「日本に帰ってきた」ということを実感した。多くの日本人にとって，こうした思いは共通するものではないだろうか。このように考えると，海外で生活した，あるいは本土から離れて戦った日本人が身近にある山に本土の富士山を重ねた気持ちも，少しわかるような気がするのである。

最後に評者の個人的な感想では，本書で取り上げられた54座の写真で見る限り，「ニュージーラ

ンド富士」のひとつとして紹介されたナウルホエ山の写真が，山梨県側からみた富士山にそっくりだと感じた。読者の皆さんはどの富士が，本家によく似たものとお考えになるだろうか。

（高橋重雄）

**伊藤修一・有馬貴之・駒木伸比古・林　琢也・鈴木晃志郎編：『役に立つ地理学』**古今書院，2012年4月刊，162p.，2,600円（税別）

「地理学者はいまだ，そう名乗るたびに県庁所在地を問われ，地理学と高校地理の違いについて説明を求められている」というまえがきの記述に，苦笑を浮かべつつも思わずうなずき，やがて小さなため息をつく。本書を読み始めた評者自身の顔を想像してみると，おおよそこんなところだろう。とはいえ，地理学を専攻した方々ならきっと誰でも，似たような表情を浮かべてしまうのではなかろうか。本書は，このような状態を何とか打破しようと立ち上がった，編著者5人の若手地理学者をはじめとする研究者たちによる力作である。

本書は，2部構成の形式を取る。第1部では，8人の若手地理学者らが，自らの研究を事例として専門とする地理学の分野について紹介し，それが社会の様々な問題にどのように寄与しうるかを議論する。第2部では，5人の他分野の研究者らが自身の研究分野の視点や方法，研究成果などについて述べた上で，これらに対して地理学はどのようなアプローチが可能であるのか，あるいは，地理学からどのような分析・提言がなされることを期待するか，といった内容が記される。

第1部の「第1章　地図学者からのアプローチ」では，地図は単なる現実世界の描写にとどまらず，作り手の価値観やメッセージが色濃く反映されたものであることが指摘される。広島県福山市鞆の浦では，港まわりの埋立架橋をめぐり，日常生活の利便性向上を求める賛成派と，観光名所としての景観保全を求める反対派が対立した。そこで著者は，GISを援用して鞆の浦に関する複数の観光案内図を分析した結果，観光案内図に描かれる場所は鞆の浦の特定地域に集中していた。すなわち，架橋問題が発生している港まわりが観光圏として認知・描写され，それ以外の場所は地図から外されていた。このように，地図の分析を通じて，作り手の意図や地理的な駆け引きを明らかにできることが示されている。

「第2章　経済地理学者からのアプローチ」では，サービス産業の成長と経済のグローバル化の空間的展開について，労働者派遣業の発展を事例に論述される。労働者派遣業は，その全国的拡大とともに，様々な案件に対応できるよう，次第に専門職派遣から非中核労働者の派遣へと比重を移していき，これとともに地域の労働市場では正規雇用から非正規雇用への転換が進んだ。また，労働者派遣企業の拠点となる事業所は，企業イメージ向上のために都市の最新鋭の高層ビルに置かれる傾向にあった。個々人の生活や意思決定，企業の動向は複雑であるが，その一般的特徴を見出すとともに，経済的な合理性だけは説明しがたい部分を，空間的な制約に関する考察を通じて解明することの重要性を著者は指摘する。

「第3章　商業地理学者からのアプローチ」では，スーパー等の大型商業施設（大型店）の立地動向がどのように変化し，地域経済に影響をもたらすのかについて述べられる。経営や流通システムの変化，また政策や都市構造の変化を受けて，都市の中心市街地に集中していた大型店は次第に周辺市街地へと移動した。これにより，地域には複数の商業集積が形成され，消費行動も郊外に拡散するという都市空間の変化が起こった。今後は，